



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 155

2020年12月



「軍に仕え、信仰を最優先に」

—2020.9.12 コルネリオ会での証—

1. はじめに

私は、スティーブ・タウンと申します。アメリカの OCF (軍人将校クリスチャン交流会) の会員です。コルネリオ会との交わりは、日本の自衛隊にとっても大切であると感じています。

今日の私の証は「軍隊に仕え、信仰を最優先する」という題で、お話をさせていただきます。

私が米軍に所属し、どのように神の恵みによって支えられたかについて説明します。結論から申しますと、「イエスを追いかけている人は、いつもイエスに支えられるのが当たり前であり、絶えずその通りになる」ということです。私達は軍隊に所属していても、神様は「私たちがイエスに仕えることができる」ようにしてくださいませ。

今日の聖書のみ言葉は、コリント人への手紙第 I 15章10節です。「しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜った神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあった神の恵みである。」

私達は、自分の努力だけでは不十分で、神の恵みがなければ何もできないのです。神の力が働いていることは確かであると思います。

今振り返ると、私は子供時代から、イエスが私の命であり、私の生活に関して神様がいつも私と一緒にいて引っ張ってくれていたように思います。

2. イエスのために生きる「神の恵み」

私は、アメリカ生まれですが、2歳の時に両親と

米陸軍退役大佐 スティーブ・タウン

もに日本に来ました。父親が宣教師でしたので、2歳から14歳まで四国の愛媛県で育ちました。父親は、そこで伝道して7つの教会を立ち上げました。私は、それを見て育ったことを非常に感謝しています。

私の一番大切なことは、子供の時に日本の文化を習い、日本が大好きになり、日本を愛していたということです。特にアメリカに帰国した後も日本にいつか戻りたいと思っていました。

私が小学校3年生の時、イエスを受け入れました。その時、私は自分の家族がクリスチャンでしたから、私もクリスチャンだとずっと思っていました。しかし、その日の牧師先生のメッセージを聞いて、「一人でイエス様の招きを受けなければいけない」ということがわかりました。帰ってから、母とベッドの隣に座ってイエスの救いを受け入れました。その夜、私がクリスチャンになったことは確かでした。

アメリカに帰国した時、丁度中学校2年生の時でしたが、もう日本に戻れないことについて本当に苦しみました。それは、父が牧師になってアメリカに残ることを決めたからでした。父からのプレッシャーがあったのかもしれませんが、「聖霊を受けましょう」と言われて、私は本当にイエスのために一生仕えるかどうか考えました。その時、アメリカの8年生(日本の中学2年生)でしたが、本当にイエスのために生きようと決心しました。

それで私は、高校を卒業して、ウィートン・カレッジという有名なクリスチャンの大学に入学しました。ビリー・グラハム師が卒業した大学です。ですから人気のある大学で、授業料がとても高かったのです。その当時、牧師の家庭でお金がないので、私

は軍隊に入隊するという条件で、米国陸軍からの奨学金を申請して承認されました。

大学最後の4年生の時、陸軍人事担当の人が来て、「あなたは米陸軍でどんな職種を希望するのか」と問われ、私は「日本に行きたい」と言いました。陸軍人事担当者は、「それは希望職種ではない」と言われました。私は、卒業後陸軍に入隊する目的は、「日本に戻るためです」と言いましたが、人事担当者は「日本には米国陸軍が少ないので、その補職は非常に難しい。しかし、君のために日本に行けるように祈りましょう」と言いました。

次の日、私のところに来て祈った担当者は、「アイデアがあります。あなたが日本語専門将校になれば日本に戻る可能性は高いです。しかし、日本語専門将校になるために、まず先に普通の米軍将校として任官して普通の特技を取得した方が良い」と言われ、さらに「あなたはミサイル部隊の将校になった方が良いのではないかと思う」と言われたので、再度聞いたら、「ナイキ・ホーク部隊の将校になれば後2~3年でその部隊組織が終わるのでミサイル防空将校は、比較的簡単に別の他職種に転換することができ、語学専門将校になれる」と教えてもらいました。直ぐにミサイル専門将校になることを希望しました。しかし、米陸軍の中からは日本語専門将校になれるのは毎年2名のみです。今直ぐには決められないのですが、私はその希望が叶うよう祈っていました。その後、ドイツでの防空ミサイルのナイキ・ホーク専門将校として4年間の任務を終了し、やっと日本語専門将校に選ばれました。私は、その時“神様の恵み”が、いつも私に与えられていると感じました。

3. ミサイル将校として軍に仕える「神の恵み」

そして日本で1年間、日本語の勉強（横浜の米軍語学研修所）の機会も与えられ、さらにハワイ大学大学院でも日本語学を学ぶことができました。1990年に日本勤務となりました。

その後、在日米陸軍で日本語専門将校として働きました。通常は2年間日本で勤務したら本国に戻ることにしています。

しかし、1991年当時、湾岸戦争が行われていたので、私は、ミサイル防空専門将校の経歴から、陸軍

司令部から中東湾岸のイラクの部隊に新たにパトリオット部隊を新編するので、パトリオット部隊司令官として勤務するよう依頼を受けました。

私は、日本国を選び、日本語の勉強をさせて頂きましたので日本を離れると語学特技が失われてしまうので私は断りました。しかし、ほとんどの米軍将校達は、「そのような断ることを言う者を聞いたことがない。折角与えられる司令官職なのに」と言われましたが、日本に残りたいと、私は祈りました、これは“神の恵み”であると思いました。

そして1992年、一旦米陸軍を除隊し、直ぐに米陸軍予備役将校として在日米軍司令部のある座間キャンプの渉外部長になりました。そこから私が日本に長く住むきっかけとなり、1990年以来日本に住むことになりました。これは、“神の恵み”と考えます。このような私の軍歴は、米軍ではあり得ないのです。

ですから私が子供のころからの思いを神様がちゃんと聞いてくれて、今ここ日本に住ませて頂き、神様に支えられていることに心から感謝しています。

横浜の米軍語学研修所で学んだ後、座間の在日米陸軍司令部渉外部長の時に、長野県の野尻湖に別荘を建てました。1997年の夏休みにその別荘で火事がありました。その火事で最愛の娘のメイが亡くなりました。基地の従業員からは、「あなたは、なぜアメリカに戻らないのですか」と言われました。しかし、私の子供が日本で亡くなったことは、“神の恵み”ではないかと思い、アメリカには戻りませんでした。

それまで妻はあまり日本を好きではありませんでしたが、その事から妻も絶対日本から離れたくないと感じて、それ以来私達家族は、みんな日本にずっと暮らすことを決めました。

メイが亡くなって、私たちの子供はヘザーとジェシーの二人となり、その夏に野尻湖で聖霊を受けて二人ともクリスチャンになり、今も我が子供達二人は、この日本で宣教師として働いています。

ですから、私の家族の中でも“神の恵み”が見られることは非常に印象的です。

火事があった当時は本当に大変でした。みんなは、私の顔を見るだけで涙を流す人たちが多かったのです。そしてその後、当時の補職（座間の在日米陸軍司令部渉外部長）から、東京のハーディバラックス（六本木）の連絡将校になり、日米関係の仕事を4

年間続けました。その時に海兵隊の大佐が僕のところに来て「ちょっと話したい」と言われ、この人が立派なクリスチャンだったので2時間位話しをしました。彼は、自分が沖縄海兵隊基地司令部渉外部長であると言いました。沖縄海兵隊には、日本語を話すことができ、将校でクリスチャンという方がいませんでした。沖縄では当時、非常に大きな問題が発生していました。彼から在沖米海兵隊司令部の外交政策部長になるように説得され、私が沖縄に行くことになりました。ここで、面白いのですが、中野久永兄が同じ時期に私と一緒に沖縄にいました。本当にいろいろな問題に直面しました。しかし、神様にうまく仕えられたことを感謝しています。

その間、あの2001年9月11日事件がありました。そこで予備役達がみんな少しずつ軍に戻されました。私も3年続けて何度も呼ばれましたが、海兵隊の力で呼び戻されることはありませんでした。しかし、最後に2004年にラムズフェル国防長官が皆に向かって戻っていない陸軍予備役がいればクビになるとのことで、私は、ワシントンDCに呼び戻されました。再び軍に戻り、軍服を身に着けました。

でも信じられないのは、1992年に現役を退役した時は、階級が大尉でしたが、予備役から戻ったときは大佐になっていました。私はワシントンDCに戻って1年間勤務しようと思っていたのですが、「あなたが行くところは、イラクのアブグラフというところで仕事を担当して欲しい」と言われました。その時、私はその場所がどういうところか聞いたこともありませんでした。後でニュースなど聞いたのですが、捕虜収容所で規律が大変乱れていた場所だという事がわかりました。

そして司令官室で「なぜ私がそこに行くのですか」と聞いてみたところ、「あなたが選ばれたのは新司令官として現在の最悪状況を国連の規定に従うように、きちんとしたやり方に戻す任務をして頂きたい」とのことでした。つまり、「そこを片付けて元の捕虜収容所のように良い場所に戻して頂きたい」と言われました。私は全くそのような関係の仕事をしたこともなかったのではとても心配でした。けれども祈りました。家族にも祈ってもらい、皆でこのために祈りはじめました。そこに行く2日前に司令官に呼ばれて、私が言われたのは、不思議なのですが、「あなた

は日本の東京にあるアメリカ大使館において駐在武官になってもらいたいの、アブグラフの任務から東京に戻します。」と言われました。

“神の恵み”が私の上に見られました。私がアブグラフという極悪状態の環境から大使館勤務になったことは“神の恵み”以外に考えられません。本当に神様が私を守ってくれて、そこで2年続けて予備役として勤務しました。しかし、「米軍では、予備役として駐在武官として勤務できることは1年間だけでも聞いたこともないんだ」と言われましたが、さらにもう1年間、駐日米国大使の命令で2年間勤務することになりました。その後、北朝鮮の問題が出てきた時のことです。米国国防省副長官が日本に来るとのことで私達は、成田空港に迎えに行き、一緒に東京の米国大使館に戻りました。その間、長官から困った事があり、それは青森にレーダー入れたいのだが誰も日本語で交渉できるミサイル防空構想について説明できる者がいないとの事でした。私がその時に言ったのは、「担当として私が実施できます」と。そして、長官から「日本中のミサイル部隊の統括担当者になってもらいたい」と言われました。それは、2006年の時で、ちょうど北朝鮮がミサイルを日本の上空を通過し始めた時でした。最初は、1998年でしたが、どんどんひどくなり、ちょうど2006年のミサイル4基発射の3日前に青森県内の車力にレーダーを設置することにより、任務を遂行することができました。それで発射の航跡を常時監視できるようになり、みんな驚嘆しました。

このミサイル情報の流れをちゃんと市ヶ谷まで流せられたことは、日本側にとっても米側にとっても国益にかなうことができました。私はその時から6年間も勤務することができました。

さらにもう一度、“神の恵み”を見ることができました。私が大学生時代に将来何になるのか悩んでいた当時、ミサイル関係の軍での仕事をしようになるとは、全く考えていませんでした。しかしあの時、米軍教官大尉のアドバイスつまり、日本語専門将校として日本に行くためには、ミサイル将校として勤務をしてから、その後、日本に行けるとの考えは、まさに“神の恵み”で選ばれたと思います。

神様は私の祈りを覚えて下さり、25年後に答えを与えてくださいました。その“神の恵み”により、

パトリオットミサイルレーダーを日本の経ヶ岬に入れて、日米のミサイル防衛のために6年間勤務する事ができたということです。米国大使館の武官勤務の時に日本のミサイル構想のロードマップを作成することができました。

本当にそれを見てもう一度、“神の恵み”が私をちゃんと助けてくれたという事です。神様は、日本のために私を用いてくださいました。

(次回に続く)

キリスト教と私との出会い

現在、私は求道者としての立場であるので、コルネリオ会の皆様には大変失礼な発言などがあることをお赦し願って、この記事を書かせていただきます。

私とキリスト教とは案外近いのかも知れないと思っています。実は、私はサブカルチャーに興味があり、そこには必ず神父やキリスト教がありました。平野耕太作「ヘルシング」にはアレクサンド・アンデルセン神父が、正田崇作「Dies Irae」にはヴァレリア・トリファ神父が、「Fate Stay Night」の中にも神父がいました。

そんな中、私が本格的にキリスト教を調べるきっかけとなった作品が、正田崇作「相州戦神館學園 八命陣」でありました。登場人物に神野明影というキャラクターがいます。彼はオラショを口ずさんでいました。俗に言う「隠れキリシタン」モチーフのキャラクターであり、「さんたまりあーうらうらの一べす…」と歌っていました。カトリックであればピンと来る方もいるでしょう。自分の探求癖もあり元ネタを探していくと、自然とたどり着くロレトの連禱の一節でした。「Sancta Maria Ora pro nobis…」まさしくその一節です。そうして、元ネタを探る中でキリシタン音楽と出会い、その元ネタであるグレゴリオ聖歌に出会い、その聖歌は祈りの一節であることが多く、その祈りの言葉に自分は魅せられ、キリストの十字架に祈ることが増えていきました。

プロテスタントの教会が自分のいる町にあることは知っていましたが、自分は喫煙をしていましたので、喫煙の可能なキリスト教を探していました。そうしたら、必然とカトリックにまで来ていました。カトリック教会があることまで調べがつけば、一刻も早く救いを求めなければと、自然とカトリック教会へ足が向いていました。その時点で私は神に導かれていたのだろうと自分は思っています。神の思し召しと思います。祈禱書による日々の祈り、ロザリ

会員 渡辺忍(求道中)
オの祈り、そして外出のできる日は、ミサへとキリストの教えを学ぶ今現在求道中の身であります。

神父様と学びを通す中で神父様に言われたことで、印象に残ったことがありました。それは、「日本カトリック教会においては、憲法九条は改正すべきではないというのが方針です。自衛官である渡辺さんには気になる点もあるとは思いますが、ご理解をお願いします」と。

「自衛官は政治的活動に関与せず」が主体であり、宣誓もしています。今さら憲法などどうでもいいとは思いつつも、その中で自衛官や軍人がどのように祈り、どのように信仰を守り続けてきたかが気になり「戦場の宗教、軍人の信仰」に辿り着き、数日で読破しました。その中で自衛隊にもキリスト者の会があることを知り、このコルネリオ会と出会いコンタクトを取り、入会する算段となり、本日(2020年9月12日)Zoomで初めてコルネリオ会の例会に参加させていただきました。皆さんに出会えて大変嬉しく思い、励まされました。

最後に、現在求道者のゆえ、また若さゆえ、時折無礼な言葉を発する時もあるかも知れませんが、どうぞお赦しただければ幸いです。父と子と聖霊のみ名によって、アーメン。

献金感謝 (2020. 8. 1-2020. 10. 31)

皆様の献金を心から感謝します。

吉田 靖、瀬在道晴・米子、今市宗雄、
倉松功先生ご遺族一同、手束正昭、栗田祥子、岡村紀子
島田貫司、桜林美佐、及川雅道、桧原菜都子、石井克直
内山義彦・和子、長橋和彦、大島之成、黒田正子
荻原洋聡、清水幸子

熊本バンドについて

会員 圓林栄喜

1 はじめに

日本プロテスタントの三大源流の一つに「熊本バンド」があります。「札幌バンド」は内村鑑三、新渡戸稲造等に感化を与えたクラーク博士が有名ですが、「熊本バンド」は海老名弾正、徳富蘇峰等に感化を与えたジェーンズという米陸軍退役大尉の影響が大きかったことを熊本での生活で知ることができました。すでにご存じの方々も多いとは思いますが、概要と思うところについて短くまとめてみました。

2 熊本洋学校の設立と Janes の来日

明治維新の当時、日本は西洋列国に追いつくため様々な形で文化を取り入れようとしています。

熊本においても、熊本洋学校を設立し、西洋の先進的な学問を進取する動きが明治2～3年に始まり、明治4年にはフルベッキ博士の取り計らいで、Leroy Lansing Janes が洋学校教師として熊本に来ることになりました。

ジェーンズの父親は陸軍大佐、群保安官、長老教会の長老を勤め、母エリザベスも敬虔なクリスチャンでした。ジェーンズも、ウエストポイント陸軍士官学校を卒業し、南北戦争に北軍将校として従軍した後、ウエストポイント教官、大尉に昇任、オレゴン州スティーブンス要塞中隊長を勤め退役した陸軍軍人でした。その後、農業に従事していた矢先、熊本洋学校教師として赴任することを決意したようです。当時34歳の若さであり、家族を連れての来日でした。

3 教育スタイル

教育はすべて通訳なしで実施したようです。アルファベット、発音、スペリングとすすめ、2年目からはすべての教科（英語、算数、代数幾何、測量、物理、化学、天文、地質学、生理学、地理、万国史）が英語で実施されました。また、人前で自分の考えを述べることを重視し、英米の有名人の演説を英語で丸暗記させ人前で話させました。さらに、自学自習を訓練させ、上級生を助手として下級生の指導をさせるとともに、女子も一部授業を聴講させる等の

革新的な教育を実施しています。卒業生は第1回46人中11人（1875年、明治8年）、第2回72人中11人（1876年、明治9年）でした。

4 聖書研究会

Janes は、「バイブルはあらゆる点において研究する必要があるから、もし希望者があったら私の家で研究会を開くから出席しなさい。」と生徒を土曜の放課後や夜に聖書研究会に招待しました。

生徒らは英語熟達のため、儒教と比較するため、キリスト教攻撃の資料探索のため、閉会後のコーヒー、クッキー目当てのためと様々な動機で40人以上の生徒が出席し、ジェーンズは輪読後に熱い祈りを奉げました。最初は好奇心で参加していた生徒も、ジェーンズの真摯な祈りと態度に感化され、参加者の中からキリスト教を理解し、熱心な信者となる者も始まります。そして、1876年（明治9年）1月30日には花岡山に35人の有志が集まり、「キリスト教を日本に広めて素晴らしい国をつくろう」という誓いを立てました。現在、花岡山には「奉教之碑」が残っています。（写真参照）

5 迫害と閉校

ところが、多くの生徒が信仰をもったことが家族や親戚に知れ渡り、彼らは様々な迫害を受けることとなりました。幽閉や勘当等の厳しい弾圧があり、35名のうち、14名が盟約を破棄する状況でした。中には、親が急病で帰れと生徒に告げさせそれが、虚報であることを知りつつ決別のあいさつに来た生徒に対し、ジェーンズは「お前の生命と、キリストの生命とはどちらがとられるか。行け！殺されて来い。」と目頭に涙をたたえて励ましたそうです。ジェーンズはその收拾に奔走し、同志社英学校に受難中の生徒21名を預け、その年、1876年（明治9年）熊本洋学校は廃校となりました。ジェーンズはその後、大阪英学校で教員となった後、41歳で帰米、さらに57歳で再び日本で英語教師として赴任し、62歳で帰米、72歳で亡くなりました。

6 おわりに (信仰雑感)

(1) 何事にも真摯に取り組む

ジェーンズは初めて訪問する「日本」という国に単なる教育だけでなく、救われる魂を見出すために来日したことは疑いないと思います。

クリスチャンの信仰姿勢はまさしく何事にも真摯に取り組む姿に表れており、当時のウエストポイントでの教育も同様に行われていたのでしょう。

特に聖書研究会でのジェーンの祈りと態度はクリスチャンならではの姿であると思います。真摯に取り組む姿こそ、周囲に感化を与え、それが生徒にも影響を与えていると考えれば、我々も日々の働きの中で何事にも真摯に取り組み、置かれたところでよきキリストの香りを放つ者でありたいと思います。

(2) キリストの憐れみと恵み

熊本は、江戸時代、天草島原の乱をはじめ多くのクリスチャンが弾圧され、殉教者を出しました。

その後、明治の初めまで潜伏クリスチャンが脈々とキリスト教の信仰を受け継いできたところでもあります。

また、クリスチャンとして非業の死を遂げた、細川ガラシャの夫細川忠興も丹後、小倉と藩を変え、最後は熊本に移り住みました。熊本は比較的ミッション系の学校や教会が多いのですが、昔から主の憐れみと恵みが注がれているからではないかと思います。

(3) 神の導きに従う

6年の教育で多くの生徒がイエスキリストを信じ、真剣な決断をしたことは喜ばしいものであったはずですが、想像以上のクリスチャンに対する迫害にはジェーン自身戸惑いもあったと思います。「行け、殺されて来い」の発言は、彼がクリスチャンであるとともに軍人であったことを思わせるエピソードです。いつ死んでも我々は天国に入る約束が与えられている。との確信こそ我々も意識すべき大切なことであると思います。

一方で、1876年(明治9年)10月17日にジェーンズは熊本洋学校での任期を終了し大阪へと向かいます。この年、明治政府は外国文化を取り入れていく方針を打ち出して断髪令や廃刀令等を出しました。これに起因して熊本の武士ら約170人が10月24日に熊本県知事や熊本鎮台を襲撃し、知事を殺害するという神風連の乱を起こします。

その後も武士らの反乱が相次ぎ、福岡秋月の乱、

山口萩の乱、そして翌年の西南戦争へとつながっていきます。

熊本が神風連の乱や西南戦争の嵐に巻き込まれる直前に、ジェーン一家は大阪へ、洋学校の卒業生らも京都の同志社英学校に移り無事でした。

熊本洋学校のクリスチャンたちが殉教することなくその後の日本の近代化に関与できたことは神様の導きであったと思います。まさしく、イエスキリストとヨセフ、マリアがヘロデ王の兵士たちから逃れエジプトへ向かうシーンを彷彿とさせる出来事です。このエピソードを通して、我々が主の導きに従うとき、主が最善をなして下さることを覚えました。

神 その道は完全。主のことばは純粹。主は すべて主に身を避ける者の盾。 詩篇 18 篇 30 節

[参考文献]

潮谷総一郎、『熊本洋学校とジェーンズ 熊本バンドの人びと』、熊本年鑑社、1991年

熊本県立大学編著、『ジェーンズが遺したもの』、熊日新書、2012年

『百万人の福音 No. 827 熊本キリスト教の旅』、いのちのことば社、2019年5月号

(おわり)



花岡山に立つ奉教の碑



花岡山から熊本駅を望む